

5年ぶりの開催「蒼天会交流会」集合写真(2025年6月13日)

北海道情報大学同窓会

蒼天会 会報

Vol.23



発行:2025年12月

知の創造と未来への挑戦

北海道情報大学 学長

渡部 重十



同窓生の皆様、この度、本学の学長に就任いたしました渡部重十です。皆様からの温かいご支援と期待を感じており、心より感謝申し上げます。

長年、教育と研究の現場に身を置いてきた中で、私は「大学は社会の中でどうあるべきか」という問いと常に向き合ってきました。文部科学省が示す「教育」「研究」「社会貢献」という三つの使命は、確かに大学の役割を明示しています。しかし、その言葉だけでは、私たちが本当に目指すべき「大学の姿」は、見えてこないと感じています。

大学は、単なる知識を一方向的に伝える場所ではありません。学生や教職員、地域の方々、そして多様な個性を持つ人々が、互いに触れ合い、共に知識を創造し、未来を切り開くための、「場所」だと考えています。ここでは、誰もが自分自身と向き合い、変化を恐れず、好奇心を満たし、一人の人間として次のステージへ飛躍する機会を得るはず。過去から未来へと続く知の糸を紡ぎながら、まだ見ぬ真理を探究し、新たな価値を生み出す、それが私たちが目指す「探求と創造の場所」としての大学です。

この「探求と創造」の精神を支える上で、本学が建学以来掲げてきた「情報化社会の新しい大学と学問の創造」という理念が、今、改めて重要な意味を持つと確信しています。情報とは、単にコン

ピュータを動かすための道具ではありません。自然界から社会の複雑な営み、そして広大な宇宙に至るまで、あらゆるものが「情報」によって構成されています。この膨大な情報の中から、本質的な価値を見出し、現実社会の課題解決へと繋げていくことが、私たちに、社会から求められている使命だと考えています。

本学は、建学から時間が経った今も、決して完成したものではなく、常に社会の変化に対応し、進化し続ける生命体のような存在であると信じています。だからこそ、私たちは歩みを止めることなく、学びを求めるすべての人にとって魅力的な場であり続けるために、思い切った改革を進めなくてはなりません。

その第一歩として、2026年度より経営情報学部を総合情報学部へ、先端経営学科を経営情報学科へと改名し、より大学の核となる理念を明確に反映させたいと考えています。また、2027年度には、北海道情報専門学校と連携し、情報を活用して現代社会の課題を解決する実践的な手法を学ぶ、全国的にも他に類を見ない新学科の設置を予定しています。

これまで、専門学校、学部、大学院(修士課程)、通信教育と多様な学びの機会を提供してきましたが、これだけではまだ足りないと感じています。次なるステップとして、世界の最先端で活躍する人材の育成、社会人のリスキリング支援、グローバル化への対応をさらに強化する必要があると考えています。そのために、情報の基礎から世界の最先端の応用までを深く掘り下げ、より高度な学びを提供するための「博士課程の設置」というビジョンを構想しています。これは、学生や教職員が自由に探求・創造し、自己の成長を追求できる、より高度な学びの場となるでしょう。これに加え、通信教育で培ってきたAIを活用したグローバル化の本格的な取り組みをさらに加速させ、世界に開かれた、唯一無二の存在として本学の地位を確立させたいと願っています。

大学の教育研究は、キャンパス内に閉じたものではありません。社会と深く結びついてこそ、その価値を発揮するものです。そして、その最も重要な繋がり、他ならぬ社会でご活躍されている皆様、同窓生の皆様です。

皆様のご意見や社会が抱えるニーズを受け止め、共に未来を創り上げていくことが、魅力ある大学を築く上で不可欠です。常に10年先、あるいはその先を見据え、この大学を新たな高みへと導くために、皆様と共に切り拓いていきましょう。皆様との対話を通じて、何を求め、何を必要としているのかを深く理解した上で、明確なビジョンを描いていきたいと思っています。

本学の学生や教職員は、この大学をさらなる高みへ発展させたいという、熱い思いを共有しています。この共通の意識を持つ仲間たち、そして同窓生の皆様と共に、学生、教職員、そして地域社会全体にとって期待され、魅力ある大学を創り上げていきたいと願っています。そのためのポテンシャルが、この北海道情報大学には確かに秘められていると、私は確信しています。

僭越ながら 私の人生を少し共有

箱石 健太さん

情報メディア学科2005年3月卒業



2025年8月、卒業以来20年ぶりに大学を訪問させていただきました。まず、野幌駅がとてもきれいになっており、思わず「降りる駅を間違えたのでは?」と駅名を二度見してしまいました。大学へ向かう途中、「ほっともっと」や「セブンイレブン」がまだ残っていて、懐かしい気持ちになりながら歩を進めました。

大学では、斎藤一先生に学内をご案内いただきました。当時の面影を残しつつも、大きく変わったキャンパスに驚きました。さらに素晴らしい環境が整備され、在学生の皆さんがとても良い環境で学生生活を送っている様子を想像しながら拝見しました。

申し遅れましたが、私は情報メディア学部情報メディア学科の1期生、箱石と申します。現在は建設コンサルタント会社の研究機関で、AIと土木分野を融合した研究を行っています。近年多発する災害に対し、社会インフラによる防災・減災をAI技術でどのように実現できるかというテーマに取り組んでいます(一言で表現するのは難しい...)。今回大学を訪問したのは、ちょうど北大で学会があり、立ち寄ったのがきっかけです。

今年から研究のさらなる進化?を目指し、筑波大学大学院の博士後期課程(Ph.D.)に進学しました。若い学生や海外留学生と共に

に、日々研究に励んでいます。在学当時は博士課程の存在すら知らず、全く想像もしていませんでしたが、さまざまな出会いや経験を経て、今の道にたどり着きました。

大きな転機は、東日本大震災で岩手の実家が被災したことです。当時は東京にいましたが、自分の無力さを痛感しました。間接的にできることは多くあったと思いますが、「直接役に立ちたい」という思いが強く残りました。自分の強みをどう活かし、社会に貢献できるかを考え続けた結果、今の仕事に至っています。運にも恵まれ、現在は研究室の課長を務めています。

皆さんも、何がきっかけで人生が大きく変わるかわからない時代です。大変なことも多いと思いますが、自分自身の使命ややりがいを見つけてください。すでに見つけている方もいると思いますが、私は30歳を過ぎてから見つけました。いかに「流れ」を見極めるかが重要だと感じています。

最後に、野村克也氏の著書『「運」の正体—ID野球の提唱者が明かす!』をご紹介します(取り留めのない文章でスマセン!)。「考えること、気づくこと、感じること、そして行動すること」——これが運を呼び込むという考え方です。この紹介だけでは少し胡散臭く感じるかもしれませんが、この本が皆さんの何かのきっかけになれば幸いです。それでは、皆さまのさらなるご活躍を祈りつつ、私自身も精進してまいります。



北京で開催されたHIC2024での発表

TOPICS

「学生チャレンジプログラム」への支援

今期、蒼天会では新たな試みとして、全学部対象の「学生チャレンジプログラム(チャレプロ)」の支援を決定いたしました。チャレプロは学生のチャレンジ精神を育む事業として、今期は「地域の課題解決」をテーマに募集があり、7プロジェクトの応募の中から、厳正な審査を経て5チームが採択されました。5月末に行われた審査会では、蒼天会役員が審査員として参加。多様なアイデアが熱のこもったプレゼンテーションで披露され、蒼天祭当日には各プロジェクトの中間発表がありました。本事業は蒼天会が直接学生支援を行う初の試みであり、次世代を担う若者の成長を間近で支えられる貴重な機会と成りました。(執筆:川田尚紀(同窓会役員))



キャンパス・プレミアムランチ・プロジェクトおよび食生活改善運動(100円朝食)に協力しています

学生生活の充実には、しっかり食えることが欠かせません。本年度は、食に関する2つの学生支援を実施しています。

キャンパス・プレミアムランチ・プロジェクトは、月に1度、特別な食事を楽しんでいただく企画で、初回のいくら丼(470円!)は大好評で、開店前に食券が完売しました。

食生活改善運動(100円朝食)は、市内4大学合同の恒例行事(年2回 計6日間)で、朝食の大切さを実感してもらうこと、経済的支援を目的としています。

これらの取り組みを通じ、学生の皆さんの笑顔に出会うことができました。今後も、学生の豊かな学生生活を陰ながら支えていきます!(執筆:木下篤史(同窓会役員・学生課職員))



品質を守る最後の 砦として

佐藤 亮さん

システム情報学科2017年3月卒業



皆様、はじめまして。経営情報学部システム情報学科2017年卒業の佐藤亮です。学生時代は長尾ゼミに所属しており、同期と卒業論文に取り組んでいた日々が懐かしく思い出されます。

私は現在、QAエンジニアとしてウイングアーク1st株式会社のソフトウェアプロセス&品質改善部に所属しております。主な業務は、ソフトウェアをテストするための「観点」を設計することです。どのような角度から、どのような手順で検証すべきかを考え抜き、効率的で網羅性の高いテスト計画を立てています。また、テスト自動化にも取り組んでおり、繰り返し行われるテストをプログラムで実行できるような仕組みを構築しています。

ご縁がありまして、キャリアデザインの講義で卒業生講話としてお話をさせていただきました。その後、広報課と連携してQAエンジニアとはどのような仕事なのかをインタビューしていただきました。キャリアデザインでの講義の中で、「QAエンジニアって知っていますか?」と聞いたところ、知っていると手を上げてくれたのは少なく、認知度の低さを痛感させられました。やはりソフトウェア業界では開発をするエンジニアが注目されますが、QAエンジニアは開発エンジニアが作成した製品の最後の砦とも言われています。お客様に提供されるまでの最終段階で品質をチェックするため、私たちQAエンジニアが大きな不具合を見逃してしまい、市場

に流出した場合の損害を考えるとプレッシャーのかかる仕事でもあります。もちろん開発エンジニアもアプリケーションを実装する段階でテストを実施して品質の良いものを提供できるよう、QAエンジニアは様々な支援をしています。

私が一番意識しているのは「ユーザー目線で製品を見ることを忘れない」という点です。開発エンジニアが実装した機能でも、ユーザーが利用したいと思わなければ使われません。この機能はどう使われるのか?ユーザーにとって価値があるのか?を考えながらQAエンジニアとして業務に取り組んでいます。最近では、AIや自動化技術を活用したテストも増えています。しかし、最終的にソフトウェアを使うのは人間です。だからこそ、人の目線での検証が不可欠なのです。私たちQAエンジニアは開発の最終段階で品質をチェックする「最後の砦」として、バグを見つけること



はもちろん、「使いやすさ」や「安心感」を提供することが使命だと考えています。

最後になりますが、生成AIが急速に進化し様々な分野で活用されています。私の仕事でもAIを活用したテストツールが登場していますが、AIにすべてを頼るのではなく、最終的な判断は人間が行うべきだと考えています。技術がどれだけ進歩しても、人間の経験や直感、そして責任感に基づく判断が不可欠です。同窓の皆様も、それぞれの分野でAIを上手に活用しながらも、人間としての判断力を大切にしていただけほしいと思います。

<https://j-scope.do-johodai.ac.jp/engage/1194/>



疾風の中で 見つけたもの

学生実行委員会 委員長

今野 楓真さん

情報メディア学部 情報メディア学科3年



委員長として迎えた今年の蒼天祭。正直、不安もたくさんありました。それでも、「みんなで最高の蒼天祭を作りたい」という思いで動き続け、気づけば当日は笑顔でいっぱい会場になっていました。そんな当日の様子や、準備の日々を振り返りたいと思います。

今年は10月11日・12日に開催され、「疾風怒涛」というテーマを掲げ、多くの来場者で賑わいました。

蒼天祭に向けて私は実行委員会全員が効率よく仕事を進められるよう、タイムスケジュールを作成するなど、全体を支えるサポートに徹しました。仲間たちが一人ひとり自分の役割をしっかりと果たしてくれたおかげで、例年に比べて一人あたりの仕事量が減り、スムーズに準備を進めることができました。

準備期間中は思うようにいかないこともありましたが、そのたびに話し合いを重ね、全員で解決策を見つけてきました。わたしは委員長として、誰もが意見を言いやすい雰囲気づくりを意識しチーム全体が協力し合える環境を整えることを大切にしてきました。

蒼天祭当日。初日のゲストが「ゴー☆ジャス」様だったため、朝から多くの人が入場券を求めて並んでいました。開場時間前には講堂前に長蛇の列

ができており、開演するとお客さんも運営スタッフも笑顔にあふれていて、とてもうれしく感じました。さらに、「ゴー☆ジャス」様ご本人からも「楽しかった」とお言葉をいただき、努力が報われた気がしました。

模擬店では、学生たちが工夫を凝らしたメニューを販売し、どの店も行列ができていました。焼き鳥などの定番のほか、オリジナルメニューを出す団体も多く、来場者の方々が笑顔で食べ歩きを楽しんでいる様子が印象的でした。

当日は安全面や混雑への対応など気を配ることが多く、特にゲストイベントの入場整理ではスタッフ全員が緊張していました。それでも、大きなトラブルなく終えることができたのは、みんなが声を掛け合い、臨機応変に動いてくれたのおかげだと思います。

二日目にはゲストとしてバンドの「北風と太陽」様とアイドルグループ「FRUITY」様にも出演いただき、会場はさらに盛り上がりました。

二日間を通して多くの笑顔を見ることができ、「準備できてよかった」と心から思える蒼天祭になりました。委員長としての責任を感じながらも、仲間とともに支えたことが何よりの喜びでした。

最後に、委員長として多くの仲間とともに一つの大きな目標に向かって進めたことは、かけがえのない経験になりました。支えてくださった先生方や地域の方々、そして学生実行委員会のみんなのおかげで、蒼天祭を無事に終えることができました。この経験を生かし、後輩たちがさらに素晴らしい蒼天祭をつくってくれることを楽しみにしています。

